

足関節捻挫後の受療行動について —大学女子サッカー部に所属する選手に対する アンケート調査より—

Investigation of consultation behavior in case of ankle sprain:
A questionnaire survey of university female soccer players

服部辰広*, 櫻井規子*, 矢野晴之介*, 平沼憲治*

キー・ワード : ankle sprain, consultation behavior, female soccer
足関節捻挫, 受療行動, 女子サッカー

〔要旨〕 足関節捻挫の治療は、病院、整形外科医院、接骨院などで行われることが多いが、足関節捻挫後の受療行動に関する調査報告は少なく実態は明らかではない。そこで今回、大学女子サッカー部に所属する選手を対象に足関節捻挫後の受療行動に関する調査を実施した。調査の結果から、初回捻挫後の医療機関受診率は約 80% であり、整形外科への受診率が特に高かった。しかし 2 回目以降の捻挫では接骨院への受診率が上昇する傾向がみられた。

はじめに

足関節捻挫は全スポーツ外傷の 11~12% を占めており^{1,2)}、特にバスケットボール、サッカー、バレーボールが受傷しやすい種目である³⁾。

本邦における足関節捻挫の治療は、主として整形外科医院あるいは整形外科を標榜する病院において行われているが、接骨院での治療（施術）も法的に認められており⁴⁾、医療機関の選択には幅がある。しかし、足関節捻挫後の受療行動について調査した文献は少なく、医療機関の選択には不明な部分が多い。そこで、本研究は足関節捻挫の発生が多いとされるサッカー選手に対してアンケート調査を実施することで、捻挫後の受療行動の実態を把握することを目的とした。

対象および方法

1. 対象

2014 年度に N 体育大学女子サッカー部に所属する学生 60 名を対象とした。対象者の内訳は 4

年生 12 名、3 年生 22 名、2 年生 10 名、1 年生 16 名であり、平均年齢は 20.5 歳 (±1.1) であった。

2. 調査方法

N 体育大学にあるサッカー場において、本研究の趣旨を説明した上で、足関節捻挫後の受療行動に関する質問用紙(表 1)を配布し、回収後その結果について検討を行った。統計処理には χ^2 検定を用い、危険率 5% 未満を有意差ありとした。尚、本研究は日本体育大学倫理審査委員会の承認（承認番号第 014-H77 号）を得て実施した。

3. 調査項目

調査項目は以下の 5 項目とした。

- 捻挫の既往歴
- 初めて足関節捻挫をした時の医療機関受診の有無
- 受診した医療機関の種別
- 2 回目以降の足関節捻挫における医療機関受診の有無
- 2 回目以降の足関節捻挫において受診した医療機関の種別

* 日本体育大学

表 1 足関節捻挫後の受療行動に関するアンケート用紙

足関節捻挫後に関するアンケート調査

現在の年齢、学年を教えてください。
 1, 年齢 _____ 歳 2, 学年 _____ 年生

Q1 今までにサッカーの試合あるいは練習において、足関節捻挫をしたことがありますか？
 1, ある 2, ない

Q1 であると答えた方に質問します。
 Q2 はじめて捻挫をしたとき医療機関を受診しましたか？
 1, 受診した 2, 受診しなかった

Q2 で受診したと答えた方に質問します。
 Q3 どこを受診しましたか？
 1, 病院 2, 整形外科 3, 接骨院 4, その他 (_____)

2 回以上捻挫をしたことのある人に質問します。
 Q4 2 回目以降の捻挫において医療機関を受診しましたか？
 1, すべて受診した 2, 受診しないこともあった 3, 受診しなかった

2 回目以降の捻挫で医療機関を一度でも受診したことがある方に質問します。
 Q5 どこを受診しましたか？
 1, 病院 2, 整形外科 3, 接骨院 4, その他 (_____)

ご協力ありがとうございました。

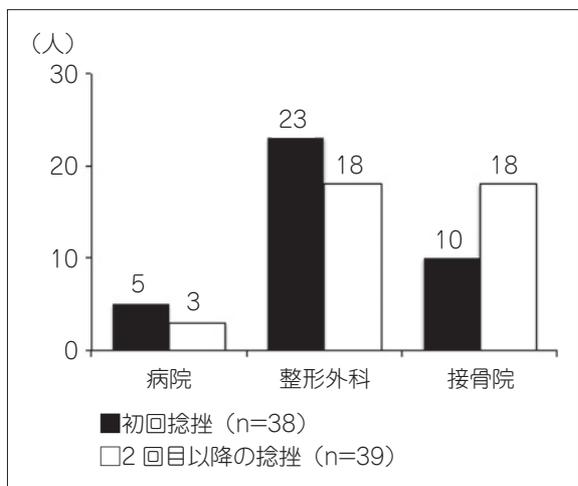


図 1 足関節捻挫時の医療機関別受診状況

結 果

1. 捻挫の既往歴

足関節捻挫の既往があると答えた選手は 60 名中 48 名 (80.0%) であった。

2. 初めて足関節捻挫をした時の医療機関受診の有無

足関節捻挫の既往がある 48 名のうち、受傷時

(初回)に医療機関を受診した選手は 38 名 (79.2%) であった。

3. 受診した医療機関の種別

初回捻挫において医療機関を受診した 38 名に対し、受診した医療機関の種別を調査した。病院 5 名 (13.2%)、整形外科医院 23 名 (60.5%)、接骨院 10 名 (26.3%) であった。

4. 2 回目以降の足関節捻挫における医療機関受診の有無

2 回以上の捻挫既往がある 40 名に対し、医療機関受診の有無を調査した。すべて受診したと答えた選手は 9 名 (22.5%) で、受診しないこともあったと答えた選手は 24 名 (60.0%)、受診しなかった選手は 7 名 (17.5%) であった。

5. 2 回目以降の足関節捻挫において受診した医療機関の種別 (図 1)

2 回以上の捻挫既往がある 40 名のうち、2 回目以降の捻挫において医療機関を受診しなかった 7 名を除く 33 名に対し、受診した医療機関の種別を調査した。医療機関の受診は全部で 39 件あり、その内訳は病院が 3 名 (7.7%)、整形外科医院 18 名 (46.2%)、接骨院 18 名 (46.2%) であった。病院と整形外科医院への受診は 2 回目以降減少傾向が、

接骨院に関しては増加する傾向がみられたが、有意差は認めなかった(図1)。

■ 考 察

本邦における足関節捻挫の治療は整形外科医院を中心とした医療機関のほか接骨院でも行われているが、捻挫後の受療行動については報告が少なく不明な点が多い。今回、初めて捻挫をした時の受療行動を調査したところ、医療機関を受診しなかった選手の割合は20.8%であった。李ら⁵⁾は、ハンドボール選手の腰部および下肢外傷後の受療行動について調査した結果、医療機関への非受診率は25.0%であったと報告している。足関節捻挫に限定した先行研究では、医療機関への受診をしていない者の割合は27~45%と報告^{6,7)}されており、捻挫を放置する例も少なくない。原田ら⁸⁾は、足関節捻挫は損傷程度によっては「たかが捻挫」と軽視され、十分な治療が行われていない可能性を指摘しているが、一定数の非受診者の存在は足関節捻挫が軽視されていることの裏付けとも考えられる。

医療機関を受診した選手の受療行動についてみると病院および整形外科医院への受診が初回捻挫時には73.7%と多く、接骨院への受診は26.3%にとどまっている。杉本ら⁹⁾は日本バスケットリーグ選手に対する足関節捻挫の調査において、捻挫後の整形外科受診率は43.2%、接骨院への受診率は16.8%であったと報告している。また石川ら⁷⁾が行った高校バレーボール部員に対する足関節捻挫の調査では、捻挫後の接骨院への受診率は30%弱であったと述べており、我々の調査と類似した結果となっている。一方で、秋田県におけるスポーツ検診では、小児期の足関節捻挫の病院受診率が14%であったのに対し、接骨院への受診率は約3倍の41%であったとの報告もあり⁶⁾、足関節捻挫後の受療行動は、競技種目、競技レベル、受傷年齢、地域性などにより相違があると推測される。

2回目以降の捻挫についてみると、受診しないこともあった、受診しなかったと回答した選手が77.5%を占めており、全体の受診率は低下する傾向がみられたが、医療機関ごとの受診率では、接骨院が46.2%に増加したのに対し病院・整形外科医院への受診は減少していた。初回捻挫と2回目以降の捻挫で受療行動に変化が生じた理由については、選手自身の経験から捻挫を軽視している可

能性などが考えられるが、捻挫の受傷回数と受療行動との関連性に言及した先行研究は渉猟できず文献的考察は困難であった。今後は対象数を増やし、捻挫時の医療機関選択理由を調査することで、足関節捻挫後の受療行動をより明確にしたい。同時に、捻挫の程度や治療方法の詳細を調査し、受療行動と足関節捻挫の予後との関連性を見出すことが今後の課題である。

■ まとめ

1. N 体育大学女子サッカー部に所属する選手に対して、足関節捻挫後の受療行動に関する調査をアンケート形式にて行った。
2. 初回の足関節捻挫後の受診率は79.2%であり、そのうち整形外科医院への受診が最も多かった。
3. 2回目以降の捻挫においても整形外科医院の受診率が最も高かったが、病院および整形外科医院への受診率は減少傾向に、接骨院への受診率は増加傾向にあった。対象数を増やし捻挫の程度や治療方法の詳細を調査することで、受療行動と足関節捻挫の予後との関連性を見出すことが今後の課題である。

文 献

- 1) スポーツ安全協会：スポーツ活動中の傷害調査. 1-17, 1999.
- 2) 藤巻悦夫：スポーツにおける足関節外傷の診断と治療. 整形外科 46: 1397-1407, 1995.
- 3) Luidinga, F, Rogmans, WH: Epidemiology of acute sports injuries. Ned Tijdschr Geneesk 129: 1051-1054, 1985.
- 4) 厚生省健康政策局医事課編：逐条解説(あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師等に関する法律/柔道整復師法). ぎょうせい, 東京, 129-130, 1990.
- 5) 李 瑛美, 中川武夫, 三浦隆行：ハンドボール競技選手のスポーツ傷害と傷害後の受診行動に関する調査研究—第2報 日・韓の比較と後遺症に関する因子の検討—. 体力科学 47: 543-548, 1998.
- 6) 齊藤明義：足関節捻挫Ⅱ~Ⅲ度損傷—初期管理の重要性、とくに固定肢位について. Sportsmedicine 143: 6-15, 2012.
- 7) 石川大瑛, 成田大一, 尾田 敦ほか：高校女子バレーボール部員の足関節捻挫とリハビリテーション実施状況の実態. 第44回日本理学療法学会.

C3P2380, 2009.

- 8) 原田俊彦, 角田雅也, 黒田良祐ほか: スポーツ医学
の最近の話題と展望 II. 種目別スポーツ傷害

サッカー. 関節外科 25: 53-60, 2006.

(受付: 2016年2月15日, 受理: 2016年6月9日)

Investigation of consultation behavior in case of ankle sprain: A questionnaire survey of university female soccer players

Hattori, T.* , Sakurai, N.* , Yano, S.* , Hiranuma, K.*

* Nippon Sport Science University

Key words: ankle sprain, consultation behavior, female soccer

[Abstract] This study was aimed to investigate the consultation behavior after an ankle sprain among university female soccer players using a questionnaire. Our results revealed that after the first ankle sprain, 60.5% of the participants consulted an orthopedic clinic and 26.3% consulted a judo-therapy clinic. However, after second and subsequent sprains, there was a decrease in consultations at an orthopedic clinic and an increase in consultations at a judo-therapy clinic.